



写真1 紙芝居1枚目



写真2 『ふじ』南極航海記 表紙

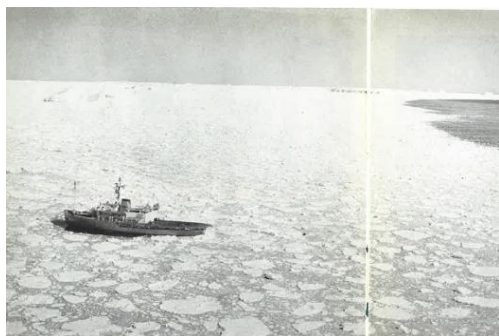


写真3 密氷群を進む『ふじ』

校長室に『ふじ』南極航海記』発行・昭和41年9月30日 発行所・朝日新聞社という本があります。読み聞かせでお話になる方から寄贈された本です。著者は第七次南極観測船「ふじ」初代艦長本多敏治氏です。関連の地域教材とともに紹介します。本多氏は、黒岩カルタに標題のようについておられ、郷土黒岩の偉

人の一人です。昭和60年度には当時の六年生が地域学習の一環で11枚の紙芝居にまどめています。今の児童も、読み聞かせの方々に読んでいただいたことがあるようです。本多氏は大正5（1916）年、上黒岩に生まれ、今の富岡高校を卒業して、戦後海上自衛隊、海防艦長・護衛艦長をへて、南極観測船艦長を第七次（昭和40年11月20日、翌年4月8日）第九次（昭和42年）の二回務め、その後海上幕僚監部南極観測支援室長を務められました。校長室には、昭和41年5月に寄贈された南極の石（展示箱には「南極の不二石 含ざくろ石変成岩」と明記）と本多氏の写真、「第九次南極観測協力記念」と裏面に明記されたペングインの絵皿が飾られています。日本の南極観測は、観測船「宗谷」

による第六次（昭和37年）までで、一旦打ち切られます。（有名なカラフト犬タロとジロとの再会が第三次）その後、国の事業として南極観測が再開・継続されることになり、そのために砕氷船「ふじ」を建造します。その初代と三代艦長を務めたのが本多氏です。本には、昭和基地に雪上車を届ける任務と、そのために密氷群（海面の七、九割が流水の状態）を突き進むタイミングの判断等、指揮官としての苦悩が書かれています。あとがきを同行した朝日新聞特派員が書いています。そこには、船中の講義での「けつして急いではない」「自然に逆らうな」「自然を尊敬せよ」「ただし自然を恐れてはだめだ」という言葉に本多氏の人生観を感じること。勝負所の密氷群突破の際は二晩を一睡もせず、頑張り通す芯の強さ。東西冷戦下、ソ連の基地への訪問をさりとこなす実行力など、に感嘆しています。なお、「ふじ」は昭和58（1983）年まで使われたあと翌年から名古屋港で一般公開されています。数年前、私も見学したことがありますが、当時、本多氏のことは知りませんが、ご貢献された黒岩出身の偉人を覚えておきたいと思えます。

ま
真つ白な南極めざす本多艦長
なんきよく
かんちよう

たんぼう
黒岩探訪

12

KUROIWA
くろいわ